

令和8年産水稻の出穂予想と栽培管理の要点

宮城県米づくり推進本部
令和8年7月22日

最新の気象情報に留意し、 生育量・葉色に応じた適正な水管理・肥培管理等に 取り組みましょう！

- 1 本年の水稻の生育は7月10日現在で平年（過去5年平均値）よりやや遅れています。県内の中生品種の出穂期は7月30日頃となる見込みです。
なお、ほ場により生育が異なるので、幼穂長による生育ステージの確認を行いましょう。（幼穂形成期[幼穂長1～2mm]:出穂25～20日前、減数分裂期[幼穂長3～12cm]:出穂15～10日前）
- 2 葉色は平年よりピークが遅く、7月10日現在では平年を上回っているものの、今後は低下が見込まれます。特に減数分裂期の葉色・生育量等に留意し、葉色が高い場合は追肥を控えるなど、葉色の推移を踏まえた管理を行いましょう。
- 3 出穂前から出穂後30日頃までの期間は、稲が最も水を必要とする時期です。高温時は、土壌を湿潤状態に保つ「^{ほうすいかんり}飽水管理」を実施しましょう。
- 4 斑点米カメムシ類について、発生は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや多い見込みです。斑点米カメムシ類の薬剤防除は穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本です。ほ場をよく観察し、適期に防除を実施しましょう。
- 5 いもち病の予防粒剤（箱施用剤、水面施用剤）の効果が低下してくる時期です。ほ場をよく観察し、葉いもちの発生が確認された場合は、直ちに茎葉散布剤で防除しましょう。
また、紋枯病の要防除水準（5%以上減収）は出穂直前（穂ばらみ期）の発病株率で、「ひとめぼれ」18%、「ササニシキ」10%以上です。要防除水準に達した場合は、防除を実施しましょう。
- 6 最新の天気予報（週間天気予報、2週間気温予報等）に留意しましょう。

これまでの気象経過

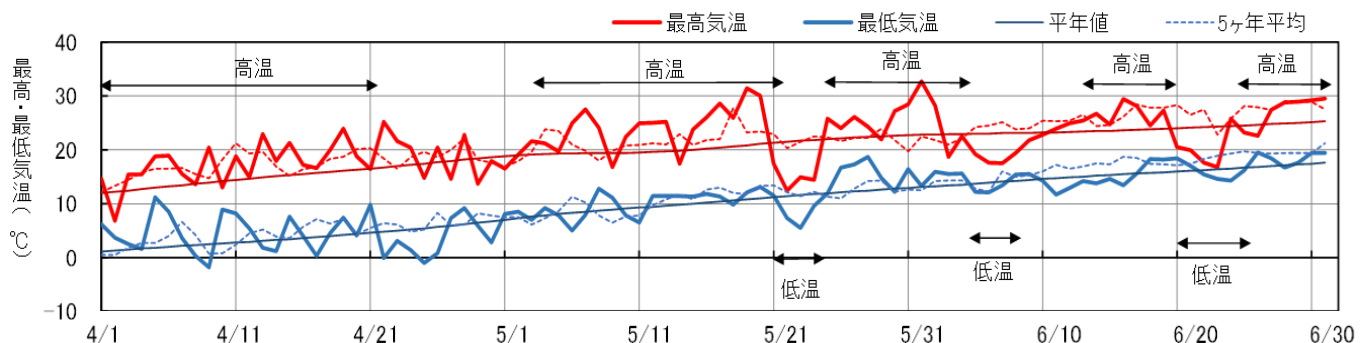


図1 稲作期間における日別平均気温の推移（古川アメダス：4/1～6/30）

1 生育概況（主要品種の生育状況 7月10日現在）

表 1 古川農業試験場作況試験ほの生育概況

品種名	移植日	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉色 <GM値>	葉数 (枚)	幼穂長 (mm)	幼穂 形成期
ひとめぼれ	5月11日	61.4 (91%)	662 (104%)	41.6 (4.2)	10.2 (-0.5)	1.3 (-1.5)	7月10日 (3日遅)
	5月20日	53.1 (82%)	630 (97%)	42.9 (3.4)	9.5 (-1.0)	0.2 (-0.2)	未
	5月29日	48.2 -	575 -	43.6 -	9.0 -	0.0 -	未
ササニシキ	5月11日	61.4 (92%)	799 (111%)	40.2 (3.9)	10.4 (-0.5)	1.0 (-3.0)	7月10日 (±0日)
つや姫	5月11日	59.1 (88%)	569 (93%)	41.9 (2.4)	10.0 (-0.6)	0.3 (-1.2)	未
だて正夢	5月11日	69.8 (96%)	528 (100%)	43.3 (4.6)	10.4 (-0.5)	0.7 (0.4)	未

注1) 各項目のかっこ内は平年比・差を表す。5月29日移植ひとめぼれは平年比・差なし。

2) 平年比・差は直近5か年（令和3年～7年）の平均値より算出。

表 2 主要品種別生育経過（生育調査ほ+5/11移植作況試験ほ）

移植日	項目	草丈 (cm)				茎数 (本/㎡)			
		6月10日	6月20日	7月1日	7月10日	6月10日	6月20日	7月1日	7月10日
ひとめぼれ	本年	26.0	30.2	48.5	58.2	181	346	460	507
	(平年比)	(94%)	(79%)	(88%)	(87%)	(101%)	(95%)	(89%)	(99%)
ササニシキ	本年	28.0	31.7	48.8	57.3	192	363	533	540
	(平年比)	(104%)	(87%)	(94%)	(88%)	(101%)	(87%)	(91%)	(96%)
つや姫	本年	25.6	30.4	47.4	58.4	184	349	446	486
	(平年比)	(95%)	(82%)	(90%)	(89%)	(110%)	(110%)	(98%)	(99%)

移植日	項目	葉色 (SPAD値)			
		6月10日	6月20日	7月1日	7月10日
ひとめぼれ	本年	37.2	41.7	42.5	39.4
	(平年差)	(-0.5)	(-2.0)	(0.9)	(0.6)
ササニシキ	本年	37.6	41.2	41.3	37.0
	(平年差)	(1.6)	(-0.7)	(1.1)	(-0.7)
つや姫	本年	36.7	41.7	43.2	41.4
	(平年差)	(-2.3)	(-2.1)	(0.0)	(0.3)

注) 調査地点数は「ひとめぼれ」15地点、「ササニシキ」6地点、「つや姫」6地点。

令和8年 夏の熱中症等対策声かけ期間（7月1日から9月30日まで）
スローガン

【いのちをうばう、夏のひとり作業】

熱中症警戒アラートを受け取りましょう！

環境省 LINE アカウントから宮城県の
熱中症警戒アラートの情報を受け取ることができます。



二次元コードから
LINE の登録が
できます。

2 生育ステージの予測

7月10日現在で、作況試験ほ5月11日植えひとめぼれの出穂期は8月1日(表3)、県内地帯区別の田植盛期に基づく出穂期は表4のとおり予測している。県内の中生品種の出穂期は7月30日頃となる見込みである。

ただし、今後の天候により、生育ステージが予測値から変動することがあるので、ほ場で幼穂長を確認し、生育ステージを把握することが重要である。

表3 作況試験ほの出穂期予測(7月10日現在)

移植日	移植時 葉齢	予測日			出穂期	
		幼穂形成期	減数分裂期	出穂期	前年	平年
5月11日	2.1	7月10日	7月20日	8月1日	7月28日	7月30日
5月20日	2.5	7月16日	7月26日	8月8日	8月2日	8月3日

注) 幼穂形成期及び出穂期は、「DVR法」による予測であり、減数分裂期は幼穂形成期の10日後とした。気温はメッシュ農業気象データ(農研機構)により、当日までの実況値とその後26日間の予報値を使用している。

表4 県内地帯区別の出穂期予測(7月10日現在)

地帯区分	田植盛期	予測日		
		幼穂形成期	減数分裂期	出穂期
北部平坦	5月12日	7月7日	7月17日	7月30日
南部平坦	5月12日	7月7日	7月17日	7月28日
仙台湾沿岸	5月12日	7月7日	7月17日	7月30日
西部丘陵	5月13日	7月8日	7月18日	7月30日
三陸沿岸	5月12日	7月11日	7月21日	8月4日
山間高冷	5月15日	7月14日	7月24日	8月13日

注1) 幼穂形成期及び出穂期は、「DVR法」による予測であり、減数分裂期は幼穂形成期の10日後とした。気温はメッシュ農業気象データ(農研機構)により、当日までの実況値とその後26日間の予報値を使用している。

注2) 移植時期の葉数は県生育調査ほ+作況試験ほ「ひとめぼれ」平均の3.0葉とした。

3 稲体窒素吸収量・葉色値の推移

- ・推定窒素吸収量の平均値(県内生育調査ほ・作況試験ほ「ひとめぼれ」)は、7月10日現在で4.6g/m²であり、平年値(過去5年間)の5.8g/m²より少ない(図2)。
- ・葉色値(SPAD502)の平均値(県内生育調査ほ・作況試験ほ「ひとめぼれ」)は、7月10日時点で39.4であり平年値(過去5年間)の38.4よりわずかに高い(図3)。

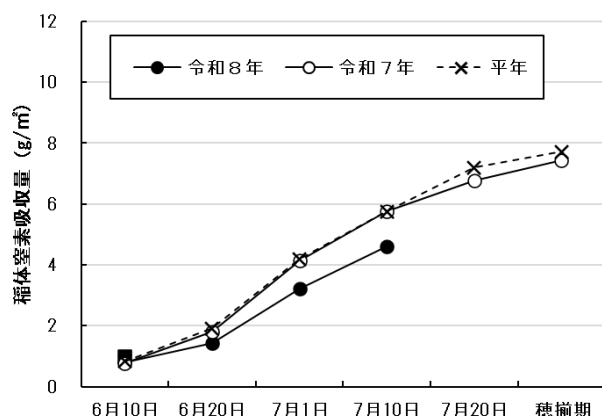


図2 稲体窒素吸収量の推移(ひとめぼれ生育調査ほ)

注1) 稲体窒素吸収量は、草丈、茎数、葉色及び移植後の有効積算気温から推定。気温は農研機構のメッシュ農業気象データシステムから得た。

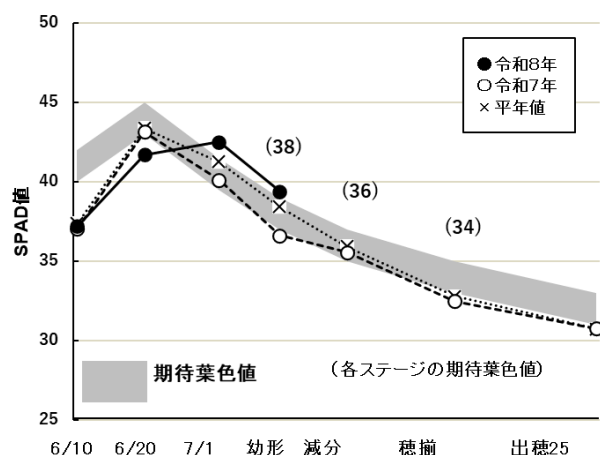


図3 水稻葉色の推移(ひとめぼれ生育調査ほ)

4 施肥窒素の残存量

- ・施肥窒素の減少は、令和7年よりも遅い推移となっている（図4）。

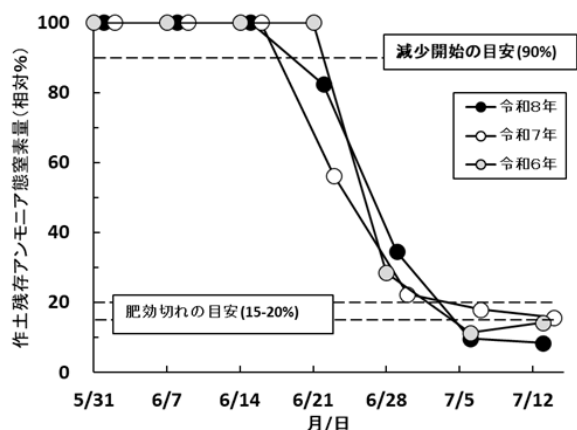


図4 土壌中残存アンモニア態窒素量の減少経過

注1) 残存アンモニア態窒素量は、株間及び条間の中央部から採取した作土中のアンモニア態窒素量 (mg/100g 乾土) とし、移植後の最も高い値を100とした相対割合で示した。

5 追肥の目安

- ・幼穂長等で幼穂形成期・減数分裂期等を確認し追肥時期を決め、穂肥の要否判定を行う（図5、表5、6）。
- ・「ひとめぼれ」で安定した品質と食味を確保するための㎡当たり粒数2.8～3万粒を目標に、穂揃期の葉色を33～35ポイントで推移させる葉色管理を行う（表7）。
- ・本年はここまで葉色が高く推移していることから、減数分裂期の葉色が目標値より高い場合は追肥を控えることを検討する。
- ・追肥後一時的に稲体窒素濃度が高くなると、いもち病に対する抵抗力が弱まるので注意する。
- ・基肥に緩効性肥料（長期溶出型の被覆尿素肥料等）を適正量施用した場合は、原則として穂肥は行わない。ただし、減数分裂期の葉色値が33以下の場合は追肥を検討する。
- ・復元田での追肥は原則として行わない。倒伏の恐れがある場合は、復元田用の倒伏診断指標（普及に移す技術第86号）を参考に倒伏軽減剤の使用も検討する。

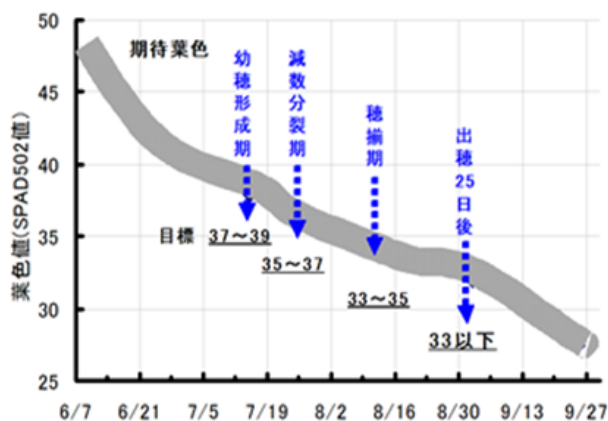
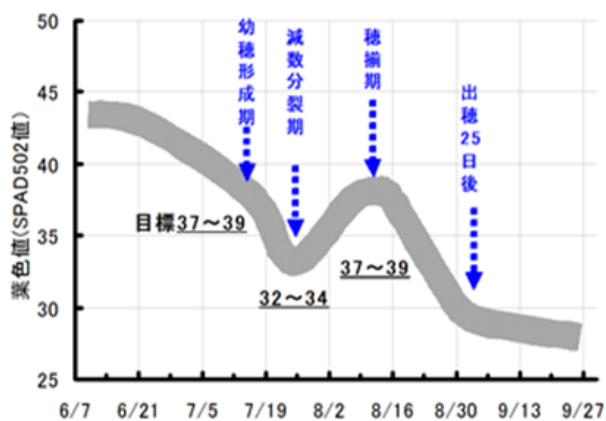


図5 期待葉色曲線（左：ササニシキ、右：ひとめぼれ）

表5－1 「ひとめぼれ」、「ササニシキ」の倒伏診断指標

幼穂形成期(草丈×㎡莖数×葉色;10 ³)							減数分裂期(草丈×㎡莖数×葉色;10 ³)										
莖数	草丈	葉緑素計値(SPAD502型)						莖数	草丈	葉緑素計値(SPAD502型)							
[本/㎡]	(cm)	38	40	42	44	46	48	[本/㎡]	(cm)	34	36	38	40	42	44		
600	50	11.4	12.0	12.6	13.2	13.8	14.4	550	60	11.2	11.9	12.5	13.2	13.9	14.5	樹 伏 危険域	
600	55	12.5	13.2	13.9	14.5	15.2	15.8	550	65	12.2	12.9	13.6	14.3	15.0	15.7		
600	60	13.7	14.4	15.1	15.8	16.6	17.3	550	70	13.1	13.9	14.6	15.4	16.2	16.9		
600	65	14.8	15.6	16.4	17.2	17.9	18.7	550	75	14.0	14.9	15.7	16.5	17.3	18.2	I	
600	70	16.0	16.8	17.6	18.5	19.3	20.2	I	550	80	15.0	15.8	16.7	17.6	18.5	19.4	II
600	75	17.1	18.0	18.9	19.8	20.7	21.6	II	550	85	15.9	16.8	17.8	18.7	19.6	20.6	III
600	80	18.2	19.2	20.2	21.1	22.1	23.0	III	550	90	16.8	17.8	18.8	19.8	20.8	21.8	
700	50	13.3	14.0	14.7	15.4	16.1	16.8	600	60	12.2	13.0	13.7	14.4	15.1	15.8	I	
700	55	14.6	15.4	16.2	16.9	17.7	18.5	600	65	13.3	14.0	14.8	15.6	16.4	17.2		
700	60	16.0	16.8	17.6	18.5	19.3	20.2	I	600	70	14.3	15.1	16.0	16.8	17.6		18.5
700	65	17.3	18.2	19.1	20.0	20.9	21.8	II	600	75	15.3	16.2	17.1	18.0	18.9	19.8	II
700	70	18.6	19.6	20.6	21.6	22.5	23.5	600	80	16.3	17.3	18.2	19.2	20.2	21.1	III	
700	75	20.0	21.0	22.1	23.1	24.2	25.2	600	85	17.3	18.4	19.4	20.4	21.4	22.4		
700	80	21.3	22.4	23.5	24.6	25.8	26.9	600	90	18.4	19.4	20.5	21.6	22.7	23.8		
800	50	15.2	16.0	16.8	17.6	18.4	19.2	I	650	60	13.3	14.0	14.8	15.6	16.4	17.2	I
800	55	16.7	17.6	18.5	19.4	20.2	21.1	II	650	65	14.4	15.2	16.1	16.9	17.7	18.6	
800	60	18.2	19.2	20.2	21.1	22.1	23.0	650	70	15.5	16.4	17.3	18.2	19.1	20.0	II	
800	65	19.8	20.8	21.8	22.9	23.9	25.0	650	75	16.6	17.6	18.5	19.5	20.5	21.5	III	
800	70	21.3	22.4	23.5	24.6	25.8	26.9	650	80	17.7	18.7	19.8	20.8	21.8	22.8		
800	75	22.8	24.0	25.2	26.4	27.6	28.8	650	85	18.8	19.9	21.0	22.1	23.2	24.3		III
800	80	24.8	25.6	26.9	28.2	29.4	30.7	650	90	19.9	21.1	22.2	23.4	24.6	25.7	I	
900	50	17.1	18.0	18.9	19.8	20.7	21.6	II	700	60	14.3	15.1	16.0	16.8	17.6		18.5
900	55	18.8	19.8	20.8	21.8	22.8	23.8	700	65	15.5	16.4	17.3	18.2	19.1	20.0		II
900	60	20.5	21.6	22.7	23.8	24.8	25.9	III	700	70	16.7	17.6	18.6	19.6	20.6	21.6	III
900	65	22.2	23.4	24.6	25.7	26.9	28.1	700	75	17.9	18.9	20.0	21.0	22.1	23.1		
900	70	23.9	25.2	26.5	27.7	29.0	30.2	700	80	19.0	20.2	21.3	22.4	23.5	24.6		

倒伏危険域

I 倒伏度2を超える確率5～20%

II 倒伏度2を超える確率20～50%

III 倒伏度2を超える確率50%以上

注1) 指標値は、[草丈 × ㎡当たり莖数 × 葉緑素計値 ÷ 100,000] で簡易に算出できる。
注2) 復元田には適合しないので、注意する。

表5－2 倒伏危険度別の対策

倒伏危険度別の対策		
倒伏危険域	生育の状態	対 策
I 未満	正常	
I	やや過剰	追肥は控える。
II	過剰	追肥不可。飽水管理。倒伏軽減剤散布。
III	かなり過剰	追肥不可。飽水管理。早めに倒伏軽減剤散布。

表6 追肥の目安(宮城県主要優良品種)

品種	窒素施肥量	
	出穂25～20日前 (幼穂形成期)	出穂15～10日前 (減数分裂期)
ひとめぼれ	1.0kg/10a	1.0kg/10a
ササニシキ	—	1.0～1.5kg/10a
まなむすめ	2.0kg/10a	—
つや姫	—	—
だて正夢	—	2.0kg/10a

※だて正夢で有効莖数不足(穂数不足)が予想される場合は幼穂形成期1.0kg/10a+減数分裂期1.0kg/10aとする。
※いずれも葉色を見て、実施する。

表7 食味と品質を良好に保つための籾数レベル
ごとの穂揃期の期待葉色の範囲
(ひとめぼれ)

		㎡当たり籾数(×100粒)				玄米タンパク含有率 (乾物%) (現物%)	
		260	280	300	320		
濃 ↑ 葉 色 ↓ 淡	品質・食味が両立する葉色範囲	41	39	37	37	8.1	6.9
		40	38	36	36	8.0	6.8
		39	38	36	34	7.8	6.6
		37	36	35		7.6	6.5
		36	34	33		7.4	6.3
		34	33	32		7.2	6.1
		32	31			7.0	6.0
		31	30			6.8	5.8
		29	28			6.6	5.6
		28				6.4	5.4
		26				6.2	5.3
		25				6.0	5.1

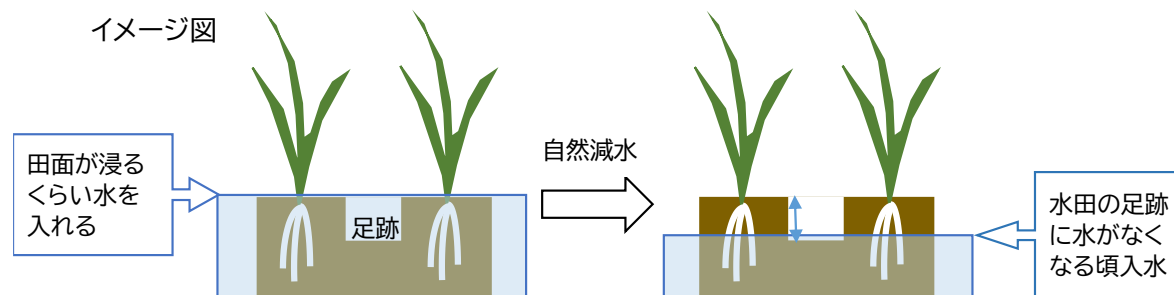
※1 白未熟粒の発生を5%程度に抑える穂揃期の葉色下限値
(出穂後11～20日の積算気温日較差80℃と想定し、玄米充填示数から算出)
※2 品質・食味が両立する葉色範囲
※3 玄米タンパク含有率は粒厚1.9mm以上の玄米、現物%は水分15%換算値
(出穂期前後50日間の積算日照時間を平年の200時間で想定し作表)

6 出穂前後の水管理

(1) 高温時の水管理

- ・土壌を常に湿潤状態に保つ**飽水管理**で維持することによって、湛水管理に比べると稲体の温度が低下しやすく、乳白粒や基部未熟粒の発生を軽減できる。

※ 飽水管理：飽水管理とは、田面の足跡の水がなくなり始めたら、田面の高い部分が浸る程度にごく浅く入水し、その後自然減水させることによって、土壌を常に湿潤状態に保つ水管理。間断かんがいより土壌が酸化的に保たれ、根の活性が高まる。用水不足が懸念されるときの水管理としても有効。



- ・落水は出穂後 30 日以降とし、登熟歩合の向上を図る。

(2) 基本的な水管理

中干し → 間断かんがい（穂ばらみ期） → 浅水（出穂・開花期） → 間断かんがい（登熟期）

- ・根腐れが発生しやすく倒伏の危険性のある水田は、有効茎を確保する頃から落水期まで、飽水管理により、根の健全化と茎の充実を図る。

7 病虫害防除

- ・発生予察情報や発生状況を確認しながら適正な病虫害防除を実施する。

宮城県病虫害防除所HP <https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/byogai/index.html>

(1) 斑点米カメムシ類

《発生状況》

- ・7月中旬の巡回調査の結果、水田周辺の畦畔における斑点米カメムシ類の発生地点率は平年よりやや高く、すくい取りは平年並であった。
- ・発生の主体はアカスジカスミカメやアカヒゲホソミドリカスミカメであるが、大型のホソハリカメムシも複数地点の畦畔で確認されている

《防除対策》

[水田周辺の草刈り]

- ・水田畦畔の草刈りは、水稻の出穂前後に行くと水田内にカメムシ類を追い込むことになるため水稻の生育状況を確認し、出穂 10 日前までに行う。
- ・薬剤防除は、穂揃期とその 7～10 日後の 2 回防除が基本である。
- ・ジノテフラン液剤（スタークルメイト液剤 10 等）、エチプロール水和剤（キラップフロアブル）、スルホキサフロル水和剤（エクシードフロアブル）はアカスジカスミカメに対する防除効果が高く、特に、ジノテフラン液剤は残効が長く、2 週間程度は発生密度を抑制することができる。
- ・イヌホタルイ、ノビエ等が発生した水田で除草ができなかった場合は、1 回目の薬剤散布時期を「出穂始から穂揃期」に早めることでアカスジカスミカメの密度を低下させ被害軽減できる。
- ・病虫害の薬剤抵抗性の発達防止のため、RAC コードが同じ薬剤の連用を避け、計画的にローテーション散布を行う。

(2) いもち病

《発生状況》

- ・7月中旬の巡回調査の結果、本田での一部ほ場で発生が確認された。

《防除対策》

- ・7月中旬以降は、予防粒剤(育苗箱施用剤、水面施用剤)の効果が低下し始めるとともに、追肥で葉色が濃いほ場は葉いもちが感染しやすい環境となるので、ほ場をよく見回り発病が見られた際は速やかに茎葉散布剤で防除する。特に、上位葉での発病は穂いもちの重要な伝染源になるので注意する。
- ・BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の推定結果では、6月中旬に県内の一部地域で、7月上～中旬に県広域で感染好適条件が出現しているため、今後の発生に注意する。
(BLASTAM: <https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/byogai/blastam.html>)
- ・水面施用剤による予防防除を実施する場合は、生育状況をよく観察し、出穂期の予測に基づき使用時期(出穂20～10日前頃)を失しないように注意する。
- ・茎葉散布剤による防除を行う場合は、1回目を出穂直前、2回目を穂揃期に実施する。上位葉の葉いもちの発生が多く穂いもちが多発する恐れがある場合や、出穂期間が長引く場合は、3回目の防除を穂揃期の7～10日後に実施する。

(3) 紋枯病

《発生状況》

- ・7月中旬の巡回調査の結果、発生地点率及び、発病株率は平年よりやや低かった。

《防除対策》

- ・前年に形成された菌核が翌年の伝染源となるので、前年に紋枯病が発生したほ場では要防除水準を参考に防除を検討する。要防除水準はひとめぼれの減収率を5%以上と想定した場合、穂ばらみ期の発病株率は18%以上となる(表8)。
- ・今後の防除は穂ばらみ期の水面施用剤や穂ばらみ期～出穂期の茎葉散布剤で行う。

表8 紋枯病の防除要否の判断基準(被害確率50%で設定)

被害許容水準	穂ばらみ期発病株率		
	ひとめぼれ	ササニシキ	コシヒカリ
収量5%以上減収	18%	10%	29%
収量3%以上減収	12%	9%	18%
収量1%以上減収	10%	3%	14%

8 直播栽培の管理

直播栽培では、一般的に慣行移植栽培に比べて生育ステージが遅く、周辺水田より葉色が濃く経過することから、病害虫の被害を集中して受ける場合がある。ほ場をよく観察し、早期発見・早期防除に努めることが重要となる。

(1) いもち病

直播栽培では、穂いもち予防粒剤を出穂前に散布する。

(2) イネツトムシ(イチモンジセセリ)

イネツトムシは幼虫期に水稻の葉を食害する害虫であり、直播栽培では、ときに多発して大きな被害をもたらす。防除適期は第2世代の若齢幼虫が発生盛期となる7月下旬から8月上旬である。ほ場内を見回り、発生が多い場合には防除を実施する。

(3) 斑点米カメムシ類

斑点米カメムシ類の薬剤防除は移植栽培同様、穂揃期とその7～10日後の2回防除を基本とする。地域一斉防除等が実施されているが、移植栽培に比べて直播栽培では出穂期が遅れることから、散布適期を把握して対応する。